

氏名	角山 朋子
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博文化甲第22号
学位授与年月日	平成28年3月24日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
学位論文題目	「ウィーン工房」研究：工芸改革運動からブランド企業 誕生に至るオーストリア近代デザイン運動の変遷
論文審査委員	委員長 教授 井口 壽乃 委員 教授 伊藤 博明 委員 教授 外山 紀久子 委員 教授 明星 聖子 委員 津田塾大学准教授 菅 靖子

論文の内容の要旨

本学位論文は、オーストリアの近代デザイン運動を牽引したウィーンのデザイン企業「ウィーン工房」（1903～1932）の活動実態を検証し、その近代デザイン史上の意義を解明した基礎的かつ実証的研究である。従来ドイツ語圏の近代デザイン史は、バウハウスに代表される合理主義的デザイン研究を主流とし、オーストリアに関しては、「世紀末ウィーン」の芸術・文化研究に留まっていた。本研究は検証が遅れているオーストリアのデザイン運動に関する研究の進展と従来のヨーロッパの近代デザイン史の再考を促し、ウィーンの表象文化研究、消費文化研究、ジェンダー研究に関わる学問的意義のある研究である。そして「ウィーン工房」のデザイン活動にみられる今日的な「イメージ」、「ブランド」、「消費」といった要素に着眼し、企業が主導的地位にあったウィーンのデザイン実践について、ハプスブルク君主国の社会・政治論的文脈に接続させ、総合的に検証している点で独自性がある。

論文は、全7章からなる本編と資料編からなり、資料編には1848年オーストリア三月革命から第二次世界大戦前までのオーストリアの美術・デザインおよびオーストリア史（社会的事象）を含む年表、ウィーン工房の製品および関連する芸術作品の図版、文献一覧がまとめられている。

第1章「オーストリア近代デザイン運動」では、英国のアーツ・アンド・クラフツ運動の工芸復興思想のヨーロッパへの波及に関して、先行研究を踏まえて、英国の社会主義運動との相違、フランスのアール・ヌーボーやドイツのユーゲントシュティールとの比較検討のうえで、ウィーンの運動が単なる英国の

受容ではなく、諸芸術分野の平等、「総合芸術」の実現、固有の様式の確立という独自の文化運動であったことを明らかにしている。これによって、ウィーン工房が他のヨーロッパ諸国のアーツ・アンド・クラフツ運動とは異なる性格を有していたことを指摘し、研究全体の目的を明確にした。さらにウィーンにおける工芸改革運動が、第一期改革の1860年代の芸術産業博物館の創設と、第二期改革のグスタフ・クリムトラ「ウィーン分離派」による芸術刷新運動と連動している点を明らかにしている。

第2章「ウィーン工房誕生の布石：ウィーン分離派によるクンストゲヴェルベシュレ改革」では、ウィーン工房が誕生の背景に関して、担い手であるヨーゼフ・ホフマンとコロマン・モーザーによる芸術産業博物館付属のクンストゲヴェルベシュレ（工芸学校）の改革について検討している。ウィーン分離派の理念を反映する基礎造形教育と工房教育の両輪とした先駆的なデザイン教育の体制が整えられたことを結論づけている。

第3章「ウィーン工房の設立構想とその初期理念：1900～1906年」では、1903年のウィーン工房設立の端緒となる1900年の第8回ウィーン分離派展に注目し、設立当初の継続的な生産・販売活動を行う工房組織の構想を明らかにした。さらに『ウィーン工房作業綱領』（1905）に記された活動理念の分析から、世紀転換期ウィーンの文化運動との連続を示すものであったことを指摘している。

第4章「理想と経営のはざままで：1907年以降のウィーン工房の企業化とデザイン特性の変化」では、1907年の経営危機とモーザーの脱退以降のウィーン工房のデザイン様式、生産領域、事業展開の変容を扱っている。ウィーン工房が経営上の戦略的措置として、新たにグラフィック部門、テキスタイル部門、モード部門を新設し、製品領域を拡充させた点、そしてパトロン依存の経営体質を残す一方で、アーツ・アンド・クラフツ団体からデザイン企業へ発展した経緯を解明している。

第5章「「ウィーン工房」のブランド確立へ：帝都の美術工芸を担う」では、クリムトグループの分離派脱退から、クリムトラによる総合芸術展〈クンストシャウ〉（1908）の検討を通じて、総合芸術の意味内容の変化を明らかにしている。さらにオーストリア工作連盟の設立（1912）をオーストリアのアイデンティティの創出ととらえ、ケルンの工作連盟展（1914）を検討しつつ、第一次世界大戦前のオーストリア君主国における国際的競争力強化とウィーン工房の高級工芸ブランドとしての企業イメージ確立を関連づけている。さらにアドルフ・ロースの工作連盟批判を検討しつつ、「近代デザイン」概念をめぐる諸問題を考察している。

第6章「第一次世界大戦下のウィーン工房：女性メンバーの躍進と国家協力」では、ウィーン工房内の「芸術家工房」部門における女性デザイナーに焦点を

あて、ウィーンの優美な装飾的デザインが宮廷国家のイメージに重ねられる様相を作品の分析から丹念に考察している。さらにフランツ・チゼックの美術教育との関連、パリのモード界への影響、フェリーツェ・リックスを通じた日本デザイン教育への波及の分析は、ウィーン工房が20世紀初頭の国際的な近代デザインの発展において重要な要となっていたことを立証した。

第7章「1920年代から終焉まで：装飾的デザインと変貌する国家、社会との距離」では、第一次世界大戦後の帝国解体による社会構造の激変と経済不況がウィーン工房の経営にどのような影を落としたか、経営の合理化と解散に至るまでの工房の活動を考察している。

結論で本論の議論をふりかえり、ウィーン工房を中心とするオーストリア近代デザイン運動の意義を、1) 芸術性と経済性の相剋からのデザイン様式の創出、2) ブランド企業の誕生、3) 首都と国家の表象の形成の三点に見出せると、結論づけた。それは「帝都ウィーン」のイメージを消費財へと転換し、「帝都」を視覚化したことであつたと論じている。

論文審査の結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を平成28年2月19日に公開で開催した。論文発表後、質疑を行い、論文内容を審査した。

論者は、国内外で皆無に等しく、学術的な研究が求められるウィーン工房研究に取り組んだ。現地調査に基づく未公開の一次資料の発掘、芸術家の書簡の解読、工房メンバーの人的関係を丹念にあたり、実証的に論述し、ウィーン工房の全貌を明らかにしたことは高く評価できる。本論文のウィーン工房の成立と発展過程を示す貴重な資料が、日本近代デザインの発展に関係の深い博覧会やデザイン教育という関連する研究領域へ新たな研究材料を提供することは間違いない。

本研究の結果から新たな疑問も浮上した。ウィーン工房の関係者の多くは同化ユダヤ人であり、ウィーンにおけるユダヤ社会と文化、ウィーン工房の金銭的問題を調査論考する余地は残されている。これらのテーマへのアプローチは、ユダヤ研究、オーストリア史、経済史の領域へと拡大するので、今後は学際的な研究が求められるであろう。

そして本論文によって、デザイン史における中心と周縁の問題、ジェンダーとデザイン、一企業による国家的イメージの創出、など今日的なデザイン学の議論を提起するためのテーマが導き出された点は、大きな成果である。

これらにより、審査委員会は、本論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと判定した。